
靈界電話

紅凰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

靈界電話

【著者名】

Z4944P

【作者名】

紅凰

【あらすじ】

Twitterで呟いたtwnovelをssにしてみました。

最先端の技術である世の人と会話出来る代物が開発された。その名も「靈界電話」と言ひらしい。

そんな夢のような話を聞いたのが半年前。ちょうど最愛の彼女が亡くなつて3ヶ月の時だつた。

こんな都市伝説じみたものは信じたくなかったが、彼女の声が聞けるならなんだつしてやろうと思つた。

例の「靈界電話」というやつはどうも青森にあるらしい。しかも一回の利用料金が10分100万円とかなり破格といつこと。だから俺は必死こいて働いた。

来る日も来る日も朝晩までほとんど休まずに働きつめた。身体の事なんて気にならなかつた。

ただ、彼女の声が聴きたい。

それを支えにして無我夢中だつたんだ。

それから半年で、もともとの貯金と合わせなんとか250万もの金を作ることが出来たのだった。

そして今。

俺は青森にある「靈界電話」の前に並んでいた。

事前に係員に俺の前には長蛇の列。後ろにも伸びている。

皆、これから思い思いの故人に連絡するのだろう。

皆一様に緊張した面持ちで並んでいる。

だが、俺だけは笑つていた。

遂に彼女の声が聴けるのだ。

彼女と話せるのだ。

笑いが込み上げて来るのも仕方ない。

待つこと四時間。

俺の前に並んでたやつの通話が終了したらしい。

嗚咽を漏らしながら足早に去つていった。

俺の気分は最高潮に達する。何を話そうか？

彼女は喜んでくれるか？

とりとめのない妄想を、己の中で繰り広げながら受話器に歩み寄る。200万と引き換えに手に入れた彼女の番号用紙を手に。「プルルル…プルルル…」こちらは靈界電話サービスです。お客様のお掛けになつたお相手は靈界におられません。まだ成仏していない可能性が

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4944p/>

霊界電話

2010年12月14日16時13分発行